



[鶴野トオル]

「マシロ、これヨさそう。今日のマシロのお尻……すごく
イイよ」





[宮澄マシロ]
「ソ……」





[鵜野トオル]

「真っ赤になって、薄く汗かいてる。ずっとひくひくして、
キモチイって言うてる」





[宮澄マシロ]
(……してる)






[宮澄マシロ]

(トオルがずっと、お尻だけ見てるのもわかる。見えないけど……わかるんだ)




[宮澄マシロ]

「っ、は……」



すうすうと外気が尻周りと腿だけに触れ、嫌でもそこばかりが鋭敏になる。



トオルの声がそこから響き、熱帯びた吐息が臀部にかかれ
ば、そのたびにひくりと尻肉が戦慄いた。



[鵜野トオル]

「顔も見えないし、声もわからない。もうここでしか、マシロのことわからないね」







[宮澄マシロ]

「つ、う……つ、う、あ……つ……」







玩具から手を離れたらしいトオルが、すり、と俺の双丘を
撫で上げる。



良く知った感触に絆された身体が途端に昂ぶり、びゅるっ
と音でも出そうな勢いで白濁を吐き出した。

An anime-style illustration of a young man with dark hair and blue eyes, looking upwards with a pained expression. He is bound by heavy metal chains around his neck and wrists. A large, dark, viscous liquid is being poured over him from above, splashing onto his face and body. The background is a warm, reddish-brown color with decorative white vine-like patterns and green leaves in the corners.

これ見よがしに尻をふり、と振れば、吐き出された精がふるふるとうちに飛び散る。



とうとう締めりを無くした孔から玩具が滑り落ちたのも構わず、あーあーとだらしく喘ぎながらサングの怒張に頬を擦り付けた。



【黄橡サンゴ】


「っは……ほんっと、すっげーイイ眺め」






[宮澄マシロ]
「あ……」





ぐちゃぐちゃに涙と唾液で濡れた顔面に、サンゴの精が纏わり付く。




すっかり汚れた俺の顔と身体を眺めたサンゴが、満足気に笑って俺を押し倒し、後孔の縁をくぱりと引き広げた。



[宮澄マシロ]
「ひ、う……っ」






[黄橡サンゴ]

「ぱっくり開いてんじゃん。上等」

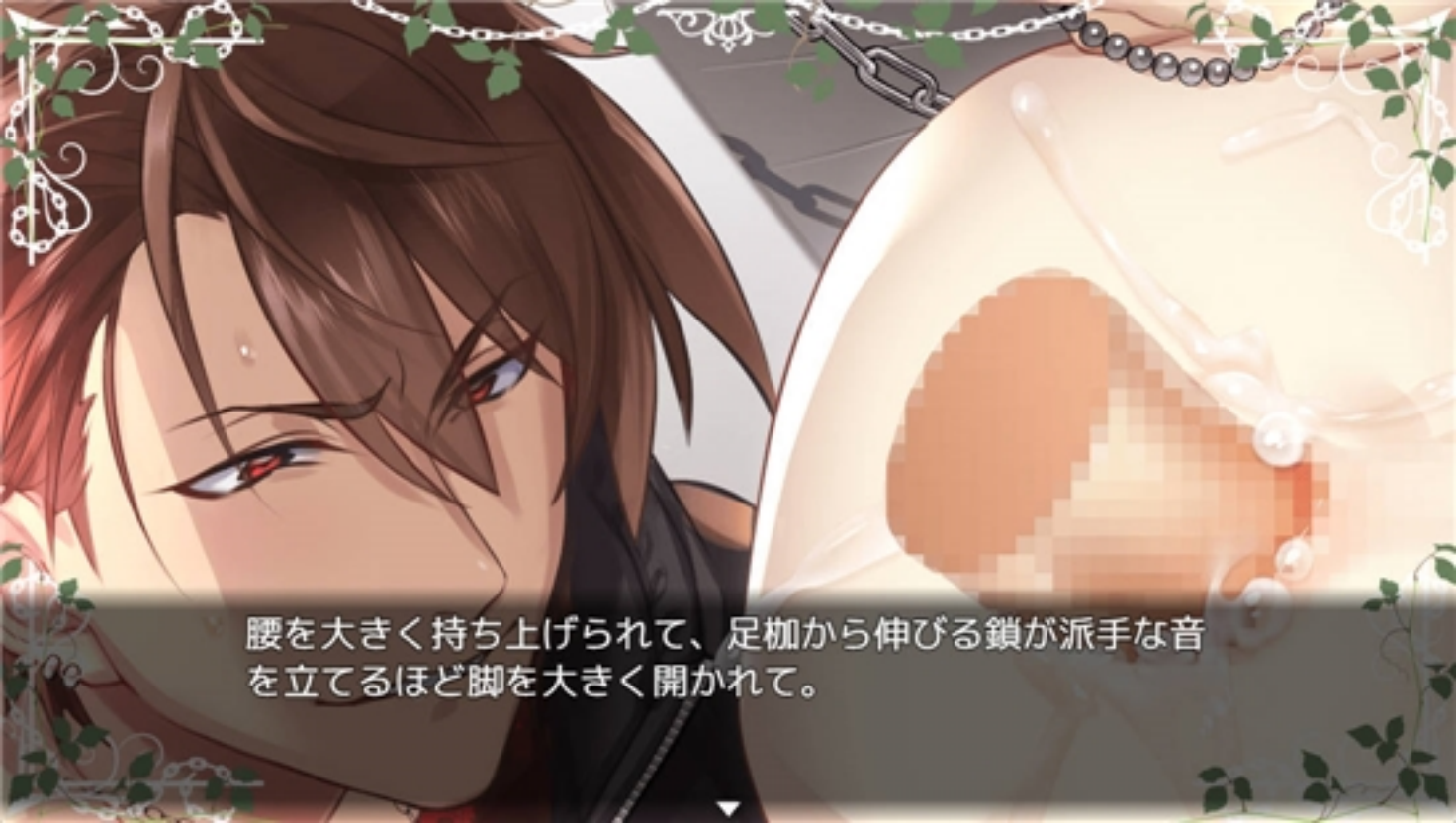


[宮澄マシロ]


「あ、あ、ああああああ、っ!!!」




玩具で緩んだ後孔に、ずちゅんと熱いモノが振り込まれる。



腰を大きく持ち上げられて、足枷から伸びる鎖が派手な音を立てるほど脚を大きく開かれて。



繋がりも、俺自身の屹立もよく見渡せる格好で、サンゴがいきなり激しく腰を打ち付けてきた。



やだ、やめと嬌声交じりの懇願を紡ぎながら再びの絶頂に怯える俺に、モモが情欲に塗れた視線を注ぎ、笑った。



【塙田モモ】

「やだね。やめてやんねえ」



【宮澄マシロ】

「っひ、あ、あああ、っ！！」



【塙田モモ】

「手が使えなきゃ、もうあんなバカできねえだろ？」







【宮澄マシロ】

「あ、あ、あああ、っあ、あ！！ ごめ、っ、ごめんなさ、
っあ、あああっ！！」





真正面から大きく脚を開かされ、なすがままの交接。



謝罪は嬌声にとって代わり、強い刺激で身体が引き攣れて
びくびくと跳ね上がる。



【宮澄マシロ】

「う、あ、ごめんなさ、……モモ、ごめん、おこらないで、
っ……ひ、う」





【塙田モモ】

「怒ってねえよ、むしろグッと来てる」



[宮澄マシロ]

「え」



【壙田モモ】


「あのマシロが、こんなもん買うまで……思い詰めて」






[宮澄マシロ]

「!!!」



抵抗に身を起こしかけた俺だが、うっとりとしてそう告げたモモにぐっと腰を入れられて力が抜ける。



いやだ、みないで、そう懇願するも空しく、モモがぺちぺちと冷たい玩具を太腿に打ち付けてきた。